
走って・跳んで・投げろ！

Bai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

走って・跳んで・投げる！

【Nコード】

N0788B

【作者名】

B a i

【あらすじ】

この小説は、一人の中学教師の陸上人生の物語です。初めて書いた小説ですが、頑張りますのでよろしく願います。

第一話 プロローグ（というか自己紹介）（前書き）

書き直しましたので、これからはこちらを読んでやってください。

第一話 プロローグ（というか自己紹介）

俺の名前は北村明信。

現在中学の教師をしている24歳。俺は現在、学校で体育の授業を教えている傍ら、陸上競技部の副顧問をやっている。陸上競技をやり始めたのが小5だから、出会って早13年。

俺の種目は『デカスロン』、簡単に言うと『十種競技』と言われる種目だ。今年（2006年現在）の24時間テレビで某有名スポーツ芸人がやったからどのような競技だか分かっていると思うが、一応どんな競技か解説すると、二日間で十種目やるのだ。

そしてやる種目はというと、初日には『100M』『走り幅跳び』『砲丸投げ』『走り高跳び』『400M』、二日目には『110Mハードル（ハードルはこれからHと書きます）』『円盤投げ』『棒高飛び』『槍投げ』『1500M』をやり、それぞれの種目の記録には点数があり、その合計点で競い合う。

現在世界規模で活躍している某ハンマー投げ選手や、なんば走法で走る有名な人たちとは違い、華やかなものじゃない。

一つの競技だけでなく、十種目全部をこなさなきゃいけないので、必然的に記録は低くなる。

走ること、跳ぶことが得意な人もいれば、投げるのが得意な人もいる。

なぜこんな種目をやっているんだと思う人も多いと思うが、このようになったのにはちゃんとした（たぶん）理由があるのだ。でも、やっている方でも、観戦している方でも感動を味わうことができるということでは、この種目が一番であろう。まあ、それは置いといて。俺のこれまでの波乱（？）な人生を見ていつてほしい。（なんだか死んだ人みたいだな。ちなみにまだ俺は生きているぞ！）

第二話 幼少期前編

それは俺が5・6歳の時、近所では元気で明るい5人組として和也、光介、亜希、千佳そして俺の5人はいつも一緒だった。毎日近くの公園に行つては、夕方まで遊んでいた。公園にはブランコやすべり台などは一通りあったが、いつも決まって鬼ごっこや追い駆けっこばかりだった。遊具で遊ぶことが嫌だったのではなく、走ることが好きだったのだ。だから基本的にみんな足が速かったのだが、その中でも俺が一番速かった。

「早く追い掛けてこいよ」

「やだよ、明信君速いんだもん」

「そんなんじゃ、一生かかっても捕まえられないよ」

「なにを！（努）」

そうやりとりをいつもやるのだが、捕まることはあまりない。

そんなある日、ある同じぐらいの知らない子が公園のベンチに座っていた。だから俺は、

「一緒に鬼ごっこやらない？一人で見ているよりはいいでしょ？」

その子

「??」

急に話し掛けられたからか、慌てていたが、落ち着くと、首を縦に振った。だから俺は、

「おい、集まって！」

「なになに？ねえ、誰その子？」

「知らない。でもつまらなそうだったから、一緒に遊んでもいいでしょ？」

みんなは声をあわせて一言

『「もちろん」

』

「よっしゃ。じゃあ、名前教えてよ。今日から僕達友達だから。俺

は明信っていうんだ。君は？」

「マツキー」

「えっ？」

」

「マツキー」

「ああ、マツキーね」

「うん。」

「じゃあ、鬼ごっこやろう」

千佳が言った。さっきまで光介が鬼だったので、マツキーとじゃんけんをした。そしてマツキーが負けたので鬼になった。

まず最初に狙われたのは俺だった。って俺！？俺が一番なことを知らないんだもん。しょうがないか。逃げ切つてやる。子供ながら、死闘（？）が始まろうとしていた。

第三話 幼少期後編

そんなこんなで死闘が始まった。

俺に向かつて走ってきたマツキー。とてつもなく速く走って来た。

その時俺の野性のかんが働いた。

「逃げなきゃ殺られる」

そう思った瞬間MAXで走りはじめた。しかし、どんどん近づいてくる。捕まると思ったたら、急に方向を変えた。次に狙われたのは近かった亜希だった。不意を突かれた亜希はすぐに捕まった。マツキー「やったー。捕まえた」

亜希

「残念、捕まっちゃった」俺

「危なかった。捕まるかと思った。マツキーかなり速くて驚いた」

千佳

「……」

何も言えなかったらしい。

和也

「明信に追い付きそうなの初めて見たかも」

光介

「俺も思った」

かなり速い。それしか思えなかった。それからというものの俺は、マツキーのことをライバルとして見るようになった。小さいガキだからって、ライバルがいちゃいけないってことはないでしょ？毎日が張り合いになった。

そんな中、初めて会ってから1年ぐらいたった頃にはみんな同じくらいで走っていた。（と言っても、マツキーが一番、俺が二番だった。）

そんなある日、マツキーが引越すことになった。そのため、お別れパーティーを開くことになり、マツキーの家に行くことになった。

家に入るとすぐリビングがあり、そこには多くの賞状やメダルがあった。これはマッキーの両親がいろんな大会で優勝したり入賞したりして貰ったものらしい。よく分からなかったが、優勝という単語を知っていたから、すげーとしか言えなかった。4人ともびっくりしているかと思って見てみたが、あまり興味がなさそうだった。パーティーが始まったが、楽しい時間というものは早く流れていくもの。すぐに終わってしまったように感じられた。

3日後、マッキーはどこかに引越して行った。小さい俺たちが行き先など聞けるはずがなく、そのまま去って行った。

それから数か月後、俺たちは小学校に入学した。

第四話 小学二年前半

それは小二のある日、春先にある毎年恒例のスポーツテストがあった。

昨年のスポーツテスト、運動会、マラソン大会ではなぜか前日に怪我をしたり、当日に高熱を出したりして、出ることができなくて、悔しい思いをしたので、今回はとても気合いが入っていたのだった。上体起こしや20Mシャトルラン、立ち幅跳びなど、毎年退屈にみんながやっていることを、楽しみながら（かなり本気で）やっていた。そしてついに50M走を走るときになった。それは俺が一番楽しみにしていた種目だった。だって、みんなが知っているとおり、俺は走ることがめちゃくちゃ好きだから。

一緒に走る相手を気にしないようにしていたが無理だった。ちなみに俺と走ることになったのは、昨年学年で一番速かった小林くんだった。たしか去年は8秒ちょうどぐらいで走っていた気がする。そんな相手だったため緊張していた。そんな中、幼馴染みの和也、光介、亜希、千佳たち4人からは、「負けたりこけたりしても骨だけは拾ってやるからな」

と、負け（惨敗）前提で言われた。かなりムカついたが、少し考え方を変えて、へじゃあ、おもいつきり負けて（こけて）やるうじやないの？と思うて、スタートについた。

やっぱりかなり緊張した。みんなが見ている中、どんな結果が出るのかな、何秒で走れるのかなと思うていたのだが、ちょっと意外（実は狙っていたかもしれない。というか予想通り？）で恥ずかしい結末になってしまった。

第五話 小学二年後半

前回の続きから。

小学生のスタートはスタンディングスタート（立ったままで走り出す方法）。そして先生の声が聞こえた。

「位置に着いて」

こうやってスタートするんだって思った。それから

「よーい」

ぱーーん

と聞こえたが、俺はその前に出てしまい、フライングになってしまった。

気を取り直してもう一度。

「位置に着いて」

「よーい」

ぱーーん

今度はうまくいった。走り初めてすぐに、不思議なことに気付いた。前に小林くんがいないのだ。そう思っていると、幼馴染みの4人が、驚いたように

「頑張れ」

とか

「負けるな」

とか、さっき言ったことと違うことを言い始めていて笑いそうだったが、こっちも余裕が無いため、聞こえるだけで精一杯だった。

残り10Mの時、急に足がぐんとなり重くなった。いつもとは違う感じから焦ってしまった。（だって、走ってばかりいたのに、走ってこんなことになったことがないから）そしてあと数歩のところまで顔から転けてしまった。その間に小林くんは抜かしていき、二年連続一位の座に着いた。俺はというと、

「馬鹿だ。本当に転ける奴がいるとは思わなかった」

と、散々馬鹿にされた。そんな中、千佳は、

「もう一回逝つとけ」

と言い、俺は回し蹴りをくらい、ぶっ倒れた。後から聞いた話によると、それを見ていた和也と光介はびっくりして思考が働かず、何もできなかったらしい。亜希はというと、そんな俺を優しく介抱してくれて、そして保健室にも亜希が連れていつてくれたらしい。千佳はというと、俺を笑いながら見ていたらしい。子供ながらにひどい女だと思った。きつと彼女なんてできないと思った。

そのことが関係してかしていかは定かではないが、その年の運動会もマラソン大会も出ることができなかった。そんな時俺は、真面目に神を恨んだ。そして、来年こそはと神に願った。

第六話 小学五年第一部（前書き）

この学年の時はとても長いです

第六話 小学五年第一部

小3からはスポーツテストも運動会もマラソン大会も出ることができた。出れた時は本当にうれしかったのを覚えている。しかし、浮かれ気分でも3年も4年もやっていたので、運動会はぼろぼろ。マラソン大会は走ると最後尾を走っていたので、4人からは（特に千佳には）散々言われまくった。

それから小5になり、スポーツテストも運動会でも、結構良い走りできた。（自分が思うに……）

運動会が終わって数日後、担任から呼び出された。周りからは、「何やらかしたんだよ？」

と、かなり聞かれた。が、自分でも何も問題を起した記憶が無い。かなりびくびくしながら放課後を待った。

帰りの会が終わりにすぐ担任が

「付いてきなさい」

と言われた。年貢の納め時だと思って職員室で言われたことに、かなり驚かされた。

「来月の真ん中あたりに市内の陸上大会があるんだが出てみないか？」

俺は一瞬というか、少しの間目が点になり、思考が働かなかった。

理由はもちろん怒られると思っていたから。（自分では何もやっていないことは分かっていたが）

「先生。もう一度言ってもらえますか？」

「だから、市内の陸上大会に出てみないかと言ったんだ。」

「誰が？」

「お前が」

「何で？」

「スポーツテストでも運動会でも結構速かったから、やらせてみてもいいだろうと思ったんだよ」

「なんだ〜。よかつた〜。怒られるかと思つた〜」

「何かやつたのか？」

「いや、何もやってませんよ。職員室に呼ばれるとしたら、怒られるかと思つたんですよ。つてえー！俺が出るんですか？」

「そうだ、ちなみに拒否権はないぞ。もう登録してしまつたからな」
「分かりました。怒られることと比べたら余裕ですよ。」

「その言葉忘れるんじゃないぞ」

「えっ？」

その時の先生はすごい真剣な眼差しだつた。

それを聞いてカバンを取りに教室に戻ると和也達がまだ残つていた。
「どうだつた？なんて怒られたの？」

口々に言われた。そこで俺は、

「いや、怒られなかったよ。違つたけど、市内の陸上大会に出ろつて言われた」

「なんだ、お前やつぱり出る事になつたんだ。運動会当日に担任がお前見てうなずいてたから」

そう、光介が言つた。

「やつぱり光も思つた？だつてこいつには走ることしか特技ないしな」

なんか誉めてるのかけなしてるのか分からない。

「もし、不様な負け方したら、大変なことになるからね！」

千佳が笑つてゐることは本氣つてことかな…。こいつには幼いきからひどい扱いを受けてきた。もう慣れてしまつたけど、慣れていない奴にとつては地獄としか思えない。それになぜか俺にしかやつてこない。それ以前に一度死にかけたことがあつた。思い出しただけであの時の恐怖が…。

「千佳ちゃんが言つたんだから、絶対優勝してよね。優勝したらパーティー開こうね。今から腕になるよ。」

それを聞いた瞬間みんないつせいに亜希の方に向いた。

なぜなら亜希の料理、成功する確立が2分の1。

二回作ると片っぱはともうまく仕上がり、もう片っぱは何を作り
たかったのか分からないくらい大変なことになる。普通の物語だと
かなり上手かなり下手かのどちらかなのだが、それら両方を備え
もった亜希は、ある意味最強だろう。ちなみに亜希はクラスの『お
嫁さんにしたい女の子NO・1』に選ばれたほど人気者なのだ。だ
から告白されているようだが、いつも拒否るらしい。理由は定かで
はないが、好きな奴らしい。

そんなことはどうでもいいが、大切なことを4人に伝えなくてはな
らなかった。

「ちなみに明日から一緒に帰れないから」

みんな一斉にこちらを向いて驚いた顔をした。当然だろう。いつも
5人一緒に帰っていたのだから。
でもすぐに

「しょうがないか。明信に頑張っしてほしいし」

そう和也が言った。俺は笑顔で

「ありがとう」

そう一言だけ言っただけその日は少しの間帰れない5人で仲良く（と言
っても手は繋がなかったぞ）帰った。

第七話 小学五年第二部（前書き）

続きます。まだお付き合いください

第七話 小学五年第二部

その次の日の放課後から、初めての陸上競技の練習が始まった。小学校だから、専門的な練習はせず、走ってばかりいた。50Mを5本とか、スタートの練習もちろんスタンディングでだけだった。その中には小林くん（もちろん読者の皆さんは覚えていらっしやいますよね？）もいた。

そしてそんな練習が何週間か続いた後、市内陸上大会の当日になった。

初めてこんな大会に出場したので、かなり緊張していたが、周りの人たちは普通に話してたり、リラックスしていた。

そんな中、小林くんだけは緊張しているというよりも強い違うオーラが出ていたような気がした。きつとこれが本当の陸上選手なんだと思った。（そう言えば、小林くんの説明をしていない気がする。

小林くんは、低学年の頃から地元のクラブチームに所属している、いわゆるエリートだった。だから、他校の人とはなしていた。）俺が出るのは100Mで、10時から予選が始まる。それまでにウォームアップ（略してアップ）を終わらせなくてはいけないから、競技場着いて少ししてから始めた。

その時、

「おおー！！！！」

という歓声が聞こえた。気になって見に行ったが、すでにレースが終わっていた。何があったのか聞いてみたら、同学年の女子にかなり速い娘がいたらしい。名前を

「増村 由希」

というらしい。タイムは14秒03だったらしい。でも自分には関係ないと思ったから、気にせずにアップを続けた。

そして予選の時間になった。

第七話 小学五年第二部（後書き）

まだ続きます。

第八話 小学五年第三部（前書き）

まだまだあります。まだまだお付き合いください

第八話 小学五年第三部

この予選は、6組1+2（これは予選通過に必要で、1というのはこの場合、各組上位1位がまず予選を突破できる。そして+2というのは、2位以下100Mの場合、タイムで上位2人が突破できるという意味。だから合計8人決勝に進出できる）だった。

そして俺の番になった。そしてついにスターターが

「位置に着いて」

俺はスタートに着いた。もちろんスタンディングスタートで。

「よーい」

ぱーん

音が鳴り、俺の組は走り始めた。それはそれは無我夢中で走った。自分の

「はあ、はあ」

という荒い息が聞こえた。そしてゴールした。

順位は？と思ったが余裕が無くて下を向いていたら、

「すごいな、予選1位だぞ。決勝進出だ」

すぐに、やった、決勝だ。と思ったが、さっきも言っただけで余裕が無いのだ。

走っただけでなんでこんなにも疲れるんだろうと思った。

そのまま競技場の近くで休んでいると、

「速くなったね。小さい頃は私の方が速かったのにな。」

と誰かに声を掛けられた。すぐに振り向いてみると女の子がいた。かなり可愛い娘だ。こんなかわいい娘見たことない。見たことがあれば忘れるはずが無いのに。だから、その娘に聞こうとしたら

「あつ、いけない。もう少しで時間だ。じゃあまたね。」

その女の子は去って行ってしまった。せっかく聞こうとしていたのに、と思ったが、話し掛けてきたんだからと考え直した。ちなみに終わってから1時間ほど経っていた。なので、決勝まで後1時間ほ

ど。それから20分してやっと走ることができるのだ。計1時間20分してから始まる。俺は、もうすぐ始まることから自分の緊張がピークになったことが分かった。だから、俺は大丈夫かなと思う主人公であった。

第九話 小学五年第四部（前書き）

さすがに長いですか？この学年はこの話と残り二話になります

第九話 小学五年第四部

あつという間に40分ほど経ち、召集場所に行った。そうするとさっきのあの娘がいた。『あの娘もでるんだ。すごいな。』と感心している女子の決勝になった。その娘も俺と同じ5年だった。そして思っていると、

「位置に着いて」

「よいい」

ぱーん

走り始めると一人かなり飛び出している。それはさっきの娘。周りの人に聞いてみると、

「予選でかなり速かった娘だよ。たしか名前は増村っていうんだっ
たな」

あの娘がそうだったんだ。それにしてもかなり速い。二位とは10M以上離れている。そして、歓声があがり、タイムが発表される。タイムは13秒99。かなりの大会新で優勝してしまったのだった。もちろん、6年女子よりも速かった。

女子が終わり男子。小4が終わり、俺たち5年の番になった。選手を見てみると小林くんもやはりいた。きっと彼が優勝だなと思ってスタートに立った。

そしてまもなく、

「位置に着いて」

かなりのドキドキで位置に着いた。自分の心臓が鼓動しているのがよく分かった。

「よーい」

ぱーん

一斉にみんな走りだした。もう、負けるだとか勝つだとか（負けた

ら千佳の制裁があるがそれは置いて、タイムが出ようが出まいが関係なく思いつきり走った。この長い100Mを無我夢中で走った。

そしてゴールした。結構接戦だったらしく、観客誰も叫ぼうとしない。そんな中アナウンスの結果発表が流れた。

「一位北村君。東小学校 記録 13秒26」

その結果が出た瞬間、俺と同じ小学校（小林くんは除いて）の人たちはとっても喜んだ。ちなみに小林くんは2位だった。それはかなり悔しがっていましたよ。しかし、ここで大きな問題が。最後の種目はリレーなのだが、走りきる体力がもう残っていない。一応時間ぎりぎりまで休んだのだが、行ける自信が無かった。しかしその時小林くんが

「100Mでは負けたが、リレーはチーム戦だ。俺は死に物狂いでお前にバトンを渡す。だから、お前も死ぬ気で走れ。」

その時、自分でも何かがはずれた音が聞こえた。そして何だか燃えてきて、疲れが吹き飛んだ。『絶対にこのレースは負けられない。期待に応えたい』その一心でスタートに着いた。ちなみに俺はアンカー。かなりの大役。小林くんは3走。小林くんの方がアンカーに向いていると思ったが、自分で

「俺、直線よりもカーブが得意だし、スタート苦手だから3走ね。アンカーはじゃあ北村ね。北村も俺と同じく100Mに出るから」と、走順決めるときにそう言ってたからなのだ。

かなり緊張しながら、1走がスタートしてリレーが開始された。

第九話 小学五年第四部（後書き）

一応次がこの学年の話のラストになります。

第十話 小学五年第五話（前書き）

この学年の話はラストになります。

第十話 小学五年第五話

一走が走りはじめ、早くも二走へバトンが渡った。その時見たかぎりだと、まだ横一線だった。その状態で三走に。三走は小林くん。わずかだが前に出た気がした。さすがに速かった。そして俺にバトンが渡るぐらになり、走り始めた。ちゃんとバトンは渡し、イッキに加速した。周りは俺に近づいていないのか、荒い息が聞こえない。しかし、

「危ない、裏から来てるぞ。抜かされるかも」

とかゴールしてから周りに聞いてみると口々にそう言っていた。意外と接戦だったらしい。

そんなことはまったく知らずにそのままゴールした。結果、リレーは俺の学年は男子のみ優勝を果たし、6年生男女ともに優勝だった。これは創立以来の快挙らしい。俺の学年の女子はあの増田由希がいたチームだった。ちなみに俺の学校は3位だった。

終わって帰ろうとしたら、増田由希が声をかけてきた。

「二冠取るなんてすごいね。きつと取ったの私たちぐらいじゃないの?」「そうみたいだけど、一つ聞きたいことがあったんだけど…」
「なーに?」

「俺と君ってどこかであつたことあるんだっけ?」

「えっ?覚えてないの?」

「本当に分らないんだけど。」

「ひつどーい!私だけ舞い上がっていたなんて恥ずかしい。分かった、会えるかどうか分らないけどじゃあね。」

「あっ…」

そのまま彼女は去って行ってしまった。

帰った後、亜希たちにお祝いされた。ちなみに、亜希の料理は成功していたのがよかった。

みんなからも一言ずつだけど、お祝いの言葉をもらった。その後は

子供らしく、亜希が作った料理を食べた。

その日の夜は、大会で優勝した喜びと、増田は誰なんだろうという疑問が頭の中でいっぱいだったので、全然眠れなかった。

第十話 小学五年第五話（後書き）

この学年は最後になりますが、本編はまだまだ続きます。これから
も読んでいただけるように頑張りたいです。

11話 中学1年第一部

次の年。俺が小六のとき。再び市内の陸上大会に出場した。また、昨年と同じように100Mとリレーに出場し、両方とも優勝を果たすことができた。そしてあの増村由希も俺と同じ種目で優勝した。しかし、彼女は俺に話し掛けようとせず、俺から話し掛けようとしても無視して行ってしまい、結局話することができなかった。

そして数カ月後、俺等は小学校を卒業した。幼なじみの四人とも同じ中学に入学することが決まっていたので、入学式になるまで遊んでいた。その後数週間経った後入学式があり、晴れて中学生になった。クラスはみんなと一緒にだったが、その中にはなんと増村由希がいたのだった。すごい気まずかったが、気にせずにその日が終了した。

数週間の部活動の見学、仮入部を経て、入部することができた。もちろん俺は陸上競技部に入部した。その中には増村、小林くんの姿もあった。しかし、大変だったのはここからで、早くも大会が近かったのだ。

（作者は関東に住んでいるので、その場合には、ほとんどが共通種目 全学年一緒 だったが、中には各学年ごとにわけられている種目があり、それは100Mだ。だから、1年でも大会に出場することができ。他にも、男子は1500Mで、女子は走り幅跳びのように、1年だけで出場できる種目もある。もちろん共通もあるが。）もちろん、俺が出場しようとしたのは100Mだった。しかし、やはり一番人気の種目であったために、希望者が多かった。ざっと6人はいたかな…

その中から本戦に出場できるのはたったの3名！だから、1年だけで予選会を開いた。

他の種目も人数が重なっていたから、同じように先輩達も予選会を開いていた。

そして、運命の中学のファーストラン。練習ではある程度は走っていたが、まわりは小学校の時に、すでにどこかのクラブチームに入っていたのが多かったから、練習慣れしている人が多かったために、追い付けるわけもなく、いつも練習後はグロッキーな状態が続いた。しかし、やはり一番人気の種目であったために、希望者が多かった。ざっと6人はいたかな…

その中から本戦に出場できるのはたったの3名！だから、1年だけで予選会を開いた。

他の種目も人数が重なっていたから、同じように先輩達も予選会を開いていた。

そして、運命の中学のファーストラン。練習ではある程度は走っていたが、まわりは小学校の時に、すでにどこかのクラブチームに入っていたのが多かったから、練習慣れしている人が多かったために、追い付けるわけもなく、いつも練習後はグロッキーな状態が続いた。だから、まだ少し筋肉痛は残っているし、自信があまりなかったから、負けるだろうと弱気になった。

そんな中、みんなの準備ができたために、スタートの合図が出た。6人は、スターティングブロック（スタブロ）の後ろに並んだ。

もちろんみんな自分が負けるはずがないという自信があって、気持ちで負けそうになった。

そんな中増村が、

「そんなんだと、千佳ちゃんのきつい一言が待っているよ」
という声が聞こえた。その一言で我に帰り、気持ちを落ち着けるこ

とができた。

なんで千佳のことを知っているのだろう、という不思議はあったが、そんなことよりも、まずは悔いを残さず走ろうという気持ちになった。結果はこれから数十秒後に出るのだった。

12話 中学1年第2部

それから数日後、地区大会が開催された。地区大会といっても、中には関東大会まで行けるような強い選手がいるかもしれないのだ。それに、中学初めての大会だからかなり緊張していた。

学校内の予選会というと、俺はなんとか3位に入り、出場権を手に入れた。

勝った3人はかなり喜んだが、負けた残りの3人は、自分は勝つ気満々だったためか、落ち込み具合は尋常じゃなかった。なので、今大会は、100Mと1年男子の4×100Mリレー（名前が変わっても小学校の時と同じで、一人100M走ってバトンをつなげればいいのだけれど、いつもながらバトンパスは難しい）の二種目に決まった。3人は決まった。そして残り1人は、4位になった人だった。それからは、地区大会に向けて練習に励んだ。

そして、当日になったのだ。競技場に着いたが、俺の時間まではあまりなかった。だからすぐにウォームアップを始めた。

それから約1時間後、自分が走る番になった。まずは予選があった。

数分後

俺はゴールで膝に手をついた状態で肺に酸素を送っていた。結果は2位に5メートルほど差を付けて1位だった。中学初めての大会で緊張したが走れた喜びを噛み締めていた。

本当は流しても予選は突破できただろうが、そんなことを知る由も

なかった。

決勝は午後から。そして、県大会に出られるのは3人まで。休まなければと思い、陣地で寝転んでいた。しかし、1年がそんなことを許されるわけもなく、あえなくどかされてしまった。

仕方がなく、近くの木陰で休んでいた。そこへ、増田が近づいてきた。

「まずは予選突破おめでとう！」

「ありがとう……」

「かなり疲れてるね」

「うん、かなりね。増田はどうだったのって、もちろん通ったんでしょ。さっき放送で聞いた」

「やっぱり、昔のようには呼んでくれないんだね」

「えっ……？」

そう言った瞬間に、どこかに行ってしまった。

昔って言っていたけど、どれ位前なんだ？疑問がいつぱいある中、それでも休んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0788b/>

走って・跳んで・投げろ！

2011年1月20日15時24分発行